

あのハスキーな声にのめり込む。 八代亜紀の声音は琴線を振るわせた

昭和歌謡 誕生物語

第七日
文・山川晋



「お酒はぬるめの燗がいい
肴はあぶったイカでいい……」

痺れる歌だった。
叙情に満ちていた。
切々と心に響いてきた。

鄙びた飲み屋で
独り盃を重ねていた花しよに、
突然、染み入ってきたメロディ。
喧嘩に嫌気の差した夜気を
孤独にいきなっていく歌声。
哀愁、哀感、悲哀の滲う歌声。
女の唄う、男の失った魂。

八代亜紀の叙情は、
男の失恋を美しい物語に昇華した。
だから、男どもは虜になった。

「涙がボロリとこぼれたら……
そんな男を自らに見立てて、
ただただ聞き惚れた。
『舟歌』、名曲中の名曲だった。

北 北海道を走る留萌線の 終着駅・増毛。暮れも 押し迫った30日、赤提灯が灯 る小さな居酒屋に連絡船の欠 航で所在無い男が入っていく。 高倉健扮する元オリンピック 射撃選手の警察官だ。店を女 手一つで切り盛りするのは 「馴子」、借負千恵子である。

客のいない店内で女が啜く。
「どんな遊び人も、正月には故
郷や家庭に帰ってしまおうでし
よ、辛いよね、そんなとき」
店に置かれたテレビからは八
代亜紀が歌う「舟歌」が流れて
いる。「この唄好きなのよ」男
は女の横顔に自分と同じ孤独
の影を感じて……。

映画「駅 STATION」
で、高倉と借負が演じるこの
シーンを観たのはいつのこと
だったろうか。過去を背負
った男と女が醸し出す空気が、
八代の歌声とが溶け込んだ、
その秀逸な演出に感服した記
憶がある。

熊本でバスガイドをしていた
八代が上京し、銀座でクラ
ブ歌手になったのは15歳の頃。
当時からその声に心酔したホ
ステスは多く、八代がクラブ
を移れば、その歌聴きたさに
店を移ったホステスもいたと
いうから驚く。そして、彼女の
歌を聴いて涙するホステス達
から、「レコードデビューして
多くの人にあなたの歌を聴か
せてほしい」と懇願されたこ
とが、デビューのきっかけだ
った。

そんな彼女が「舟歌」に出合
ったのは1979年。アビュ
ーして8年目のことだった。
作詞阿久悠、作曲浜圭介。た
だ、当初、阿久氏はこの曲を美
空ひばりに歌わせる予定だっ
たのだとか。
なるほど、確かに、ひばりバ
ージョンも捨てがたい気はす
る。が、この歌に限って「言え
ば、やはり、八代亜紀が似合っ
ている」というより、八代亜紀



をおいてほかにはいないだろ
う。なぜなら、彼女独特のスマ
ーキーな声と独特のピブラー
トが、静かに、しかし力強い迫
力で歌詞とメロディとを見事
に調和させているからだ。

「イントロが始まるとすぐに
楽曲の主人公になり代弁者に
なる」という八代。その情景描
写や感情移入の素晴らしさは、
ある意味、彼女の天賦の才能
といっていいたいだろう。

そんな彼女をして、「歌詞
を2行読んだだけで大ヒット
の予感があった」と言わしめ
た「舟歌」は、まさに出合うべ
くして遭遇した、八代自身の
魂をも強く揺さぶる運命の曲
だった。

Yamakawa Chi

1962年東京生まれ、テレビ制作会社、
雑誌編集者を経てフリーランスに。
著書に『東方神起の謎』『東方神起
J-POPをゆく』『共にイースト・プレス』、
『ビートルズとキュメンソール』、『
（グリーン）出版』など。
また、出版プロデュース作品として
『生きる 渡辺真知子』『スターUP出版』、
『アキる社員』『狂食ギョウ』（共にイースト
プレス）などを監